

## 環境ボランティアによる 「フットパス」づくり ～ウヨロ環境トラストの取組～

「歩くことを楽しむ」ことから発展した英国のフットパス(歩行者の道)。日本でも、環境省が1970年度から、多くの人々が四季を通じて手軽に楽しく、安全に歩き、豊かな自然環境や自然景観、歴史や文化に触れることを目的とした長距離自然歩道を整備(北海道を除く全国に2万1千km) '03年度からは北海道自然歩道(4,585km)に着手している。こうした国や自治体の整備する自然歩道のほか、最近では民間団体や個人がフットパスをつくる動きも各地で活発化してきている。

北海道においても、白老のウヨロ川周辺フットパス、黒松内フットパス、日高猿留山道(さるさんどう)復元フットパス、根室の酪農家によるフットパスなどの取組がなされており、また、フットパスに関わる団体・個人による「フットパス全道の集い」も'03年から開催されている。

道づくりといえば国や自治体の仕事というのが通り相場であるなか、こういったフットパスをなぜ住民が、民間団体がつくるのか。どんな人たちが、どのような思いでつくっているのかを探るため、北海道では早くからフットパスに取り組んでいる白老町のウヨロ川を訪ねた。

### 英国のフットパス

フットパスとは、英国が発祥の、牧場や野原を歩きながら、風景や人、動物、植物との遭遇を楽しむための道である。19世紀の大農による農地の囲い込みのころから、カンントリーウォーク(田園散策)は英国人にとっては何よりのレクリエーションで、英国人1人が年に2週間ほどはカンントリーサイド(田園地域)で楽しんでいるのがフットパス・ウォーキングであり、20数万kmのフットパスが張りめぐらされており、英国のフットパスは、次の3種類に区分される。

- ・フットパス(footpath)：徒歩においてのみ通行できる道で、いたるところにある。
- ・ブライドル・ウェイ(bridleway)：歩くだけでなく、馬や自転車に乗って通行することもできる道。
- ・バイ・ウェイ(byway)：自動車を含むあらゆる交通手段の利用が可能な道であり、一般には石垣や生垣に囲まれた旧道をさす。

※出典「英国におけるアウトドア・ライフ」オホーツク委員会1999

### みんなの熱い思いでできたウヨロ川フットパス

白老町のウヨロ川は、胆振管内の最高峰、

標高1322mのホロホロ山や、ホロホロ湿原を水源とし太平洋に注ぐ延長19kmのサケが遡上する2級河川である。「ウヨロ」はアイヌ語で岩より出る水の意である。

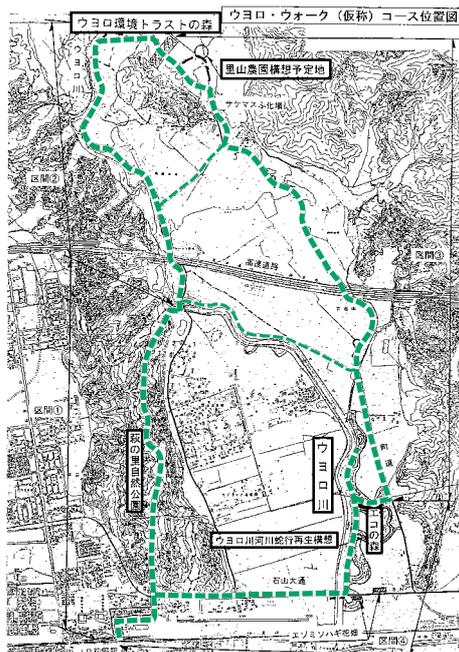
ウヨロ川フットパスは、このウヨロ川沿いに、白老町の環境ボランティア団体が共同で手作りしている全長約15kmの歩行者専用の道である。

この道づくりに中心的な役割を担ったのは、ウヨロ川の田園の景観を保全するため、'01年11月に設立('04年10月NPO法人認証予定)された「ウヨロ環境トラスト(以下「トラスト」という)」である。この実現には同じ地域で活動する「エコの森ウヨロクラブ」、「植物ボランティア・サリカリア」、「いぶり自然ガイドの会」の熱い応援がなければ成り立たなかった、とトラスト役員の辻昌秀さんはいふ。

### 活動のフィールドとフットパス

これらの団体が活動のフィールドとしているのは、萩の里自然公園雑木林とウヨロ川の周辺で、ウヨロ川中流域左岸からウヨロ環境トラストの森までの3kmは'02年からフットパスとして整備、さらにエコの森沿いの数個の

三日月湖がある下流域では河畔林内の道とウヨロ川左岸の築堤を利用したフットパスを計画し、一部ルート確保を終えている。いずれも河川管理者の北海道や白老町と協議して了解を得ながら活動している。



図一ウヨロ川フットパス

## フットパス体験記

### イーハトーブ・オーシャンファーム

取材当日は、ウヨロ中流域左岸のフットパス、ウヨロ環境トラストの森、エコの森に案内していただいた。下流部で植栽しているエゾミソハギの群落は残念ながら満開の時期（8月中旬まで）を過ぎていた。

ウヨロ川中流への道はイーハトーブ・オーシャンファームから始まった。ここは、競馬や乗馬で活躍し、リタイヤした馬が余生を送る牧場である。牧場内のフットパスを行くとサラブレッドが人懐っこく寄ってきて年甲斐もなく、「かわいい」を連発する。「ウヨロ川中流域は牛や馬の牧場があり、魅力的な里地・里山の田園景観を形成しているので、フットパスを整備する大きな動機になっています」と辻さんがいう。

川沿いの「みち」に入ると緑の回廊となり、まもなくウヨロ川の清流のせせらぎとなる。

「この景観は英国フットパスを歩いたとき、辻井達一さん（北海道環境財団理事長）にまるで白老だと言わせた」とトラスト理事で

「植物ボランティア・サリカリア」代表の新岡幸一さんは語る。新岡さんは札幌在住が長かったが、植物好きの奥さんの影響で「植物ボランティア・サリカリア」を立ち上げ、白老町に移住した。フットパスを体験しに英国まで行き、その経験を語ったり、環境学習で自然ガイド活動などを行っている。

川面を光り輝くモノが目にもとまらぬ速さで上流へ飛び去った。「カワセミですよ」、「上流には巣がある」。対岸にカワセミが獲物をねらう止まり木が見えるが、飛ぶ宝石はもう見えなかった。水面に灰色の流線型が二つのぞいた。「もうサケが遡上し始めましたね」辻、新岡両氏がうれしそうに話す。ウヨロ川は、「いぶり自然ガイドの会」の「胆振の清流 エコツアーリズム・プログラム作成事業報告書」に取り上げられているとガイドの会代表の宗廣光明さんは語る。

サケのふ化場への支流の分岐を越えると、草地が川辺まで続き、水飲み場と地雷（牛の落とし物）の形跡がある。20m先に黒牛が6、7頭現れる。「白老牛です。近寄ってくる場合があります」と新岡さんが話す。大きく直角にくねった河原の隅に病死した牛の頭蓋骨があった。「環境学習の子供に見せると精一杯「いのち」を感じている。ここではそんな体験も大切です」と辻さんはいう。

### ウヨロ環境トラストの森

こんもりと木の生えたこぶのような丘を見ながら、狭い入口からカラマツ林のトラストの森に入る。森の間伐地に小屋が見える。トラストの活動拠点、間伐材で建てたウヨロ小屋である。メインの建て屋の周りは間伐材と枝払い材が積み上げられ、道具置き場にはブラシュカッターやチェーンソーなどが所狭しと置いてある。財産持ちである。

トラスト専務理事で「エコの森ウヨロクラブ」世話役の河野功さんは、「誰も手を出さないカラマツ林2haを買うと'01年に辻さんが言い出し、トラストの森が実現した。辻さんは白老山岳会で白老町からホロホロ山への登山道づくりとホロホロ湿原への道を開いたメンバーの一人である」と話す。

トラストの森は民有地に囲まれているが、

会員の大工さんが小屋を完成し、カラマツ林の間伐・枝払いで立派な森にした実績を武器に所有者の理解を取り、徐々に活動範囲を広げる。「この活動が成功しているのは、さまざまな特技を持った人材の集まりであるからです」と辻さんは語る。



左から新岡、斉藤、河野、辻の各氏（ウヨロ小屋の前で）

昼食後、トラストの近くで、エコの森ウヨロクラブが借りて耕作する野菜畑を見学した。トモモロコシ、カボチャ、枝豆、レタスが元気に育っている。畑の周囲の網を見て、「鹿の通り道だね。でも軽々と飛び越えますよ」と河野さん。畑近くの泉へ行く途中、鹿の死骸を発見。潤んだ目でこちらを見ている。死骸の周りの草が倒れているが「ここは熊は出ないよ」と言われた。雑木に囲まれた、動物の水飲みにかっこうな湧き水があった。クレソンで覆われている底からこんこんと湧き出し、ここでは鹿といっしょの暮らしがあるようだ。

### エコの森

河野さんは、ウヨロ川下流部のエコの森で国有地の河川敷地17.7haを借り、ウヨロ川三日月湖周辺の河畔林の面倒をみている。元々は不動産業で、若い頃から登山や自然の楽しみが高じて今は木こり生活が6、7割で、家族の本業への心配をよそに肉体駆使が快感となった。60代半ばとは見えない筋肉隆々の腕でササを切り開き、周りから鉄人とささやかれるほど森づくりに貢献している。苗木、ドングリ蒔きなどで河畔林を造る。植栽木には地元種を20種ほど挙げている。三日月湖と川の狭間には、河野さんの楽しみと奮闘の跡である植栽2、3年の植林地とウヨロ川左岸の築堤上のフットパスが縦横に巡っていた。

### フットパスのネットワークを広げたい

「将来は、川を渡る方法を考えて下流域からウヨロ小屋へ結ぶルートを整備したい。バカが一人いると変わる。北海道人は私の出身の岩手県人になって、どんな小さなことも針小棒大に表現する精神と自信を持つべきで、何もないと卑下せず、ないことを誇りにすべき」と河野さんは張り切っている。

「私自身が初めてウヨロ川のサケの遡上を見たとき、こんな近くにいたのを改めて発見、感激した。都会では見られなくなったウヨロ川周辺の自然環境を地元の人にも再認識してもらい、すばらしさを体験し、ファンをたくさんつくって、その力で将来へ残しさらに広げたい。自然を感じるためのインフラであるフットパスのネットワークを広げたい」と辻さん。頭の中は、ホロホロ山の頂上につながっているのかもしれない。

「辻井達一先生が北大植物園の園路を例に、皆が歩きたいみちは道として残り、歩かないみちは草が生え自然に帰るとおっしゃったことが強く印象に残ります。ウヨロのフットパスを道として残したい」と新岡さんはいう。

「私たちの世代は、幸運にもこのように環境ボランティア、トラストで自然に親しみ、森づくり、畑づくり、小屋づくりなどの作業を日常的に楽しんでいる。これをもっと子供たちに知ってもらい、次の世代も同じ感動を味わい、活動していることを願っている。ウヨロ川周辺のすばらしさをネットワークし、歩いて実感してもらうために、フットパスを整備しようと思います。この活動を組織的に次世代に残すためにNPO法人の認証申請をしたのですから」とNPO法人理事長の斉藤春生さんは語った。

ウヨロ環境トラストが中心となり、地域のボランティア団体が協力して整備されている、自然を楽しみ、自然を感じるためのインフラとしての「フットパス」は、これからもますます拡大し、道内の他地区へも元気を与え、全道のフットパスネットワークをつなげる原動力となることを確信した。

連絡先：ウヨロ環境トラスト

tel 0144-85-2852 E-mail trust@shiraoi.org